朝日新聞社編

原爆・五〇〇人の証言

原爆・五〇〇人の証言

——被爆者追跡調査レポート——

朝日新聞社編

朝日新聞社

原爆・五〇〇人の証言

定価　三八〇円

昭和四十二年十一月二十日第一刷発行

編　者　朝　日　新　聞　社
発行者　朝日新聞社　大田信男
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　朝　日　新　聞　社
東京・名古屋
大阪・北九州

©朝日新聞社　一九六七年

目

次

はじめに　〝生きている証人〟を求めて
追跡調査の意義……8
こうして調査した……13
質問は四十項……16

第一部　あのときわたしは――《体験》
閃光を浴びた「直接被爆者」……21
〝地獄の町〟に入った「間接被爆者」……24
〝黒い雨〟にぬれて――……28
まだ消えない雨のしみ……33
地獄から逃がれ出て――……36
八月五日生れの原爆っ子……40
北の果て、南の果て……44
三人の妹を奪われて……46
ひとりぼっちになった……50
不安を胸に秘めつつ……53

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

母を失って学校も中退……56
生後三カ月で鉄片の洗礼……60
沖縄にもいる被爆者……65

第二部　ツメ跡はまだ消えない　《健　康》

「健康」はどう変ったか……71
もう一度起きて歩きたい……76
やけどがよみがえる夏……81
十年間も無事だったのに……85
愛児捜しのあとで倒れる……90
こんなにも執念深いとは……96
「人並み」になった笑顔……102
病苦と孤独の二重苦……104
入院体験で得たもの……105
入院はしたくても――……109
胎内被爆の悲惨さ……112
子どもが生めない……116
〝ぶらぶら病〟患者の自嘲……119

「まったく元気」―三五・二％……122
「手帳」が欲しい……126
「手帳」なんか欲しくない……133
定期検診の信頼度……136
定期検診が受けられない……140
不安とのたたかい……144

第三部　蝕まれた歳月のなかで　《生　活》

低い被爆者の生活水準……153
不利克服して頑張る被爆者……157
視力を失った孤老の場合……163
老人ホームへの関心……165
働ける体にしてくれ……168
ひとりきりで泣きたい……170
暮し向きはよくなっているか……173
逃がしたしあわせに泣く……176
生きぬいた家族たち……178

第四部　現実をどううけとめる？《意　識》

意外に少ない団体加入……183
いまの体調が意識を左右……190
「差別」はこの人たちにも……194
援護法についての認識……203
実態は知られているか……207
ドームと天主堂……211
四人に一人は「まだ憎い」……218
アメリカに望むさまざまな声……224
ＡＢＣＣへの批判……227
核兵器だけはやめて！……233
まず社会保障制度の確立……239
原爆医療法の整備とＰＲを——……243
結び——広島と長崎と——……251
あとがき……256
付　原爆——核兵器の足どり……258

はじめに

〝生きている証人〟を求めて

追跡調査の意義

「ほんとうの犠牲者はヒロシマとナガサキで原爆投下後、すぐ死んだ人たちです」

四十二年夏、二つの都市で開かれた原水禁大会に参加したアメリカのある大学教授の発言だ。

はたしてそうだろうか。

広島の上空で原爆が炸裂した瞬間、四十万市民のほぼ半数、二十万人が死に、長崎では市民十六万人のうち八万人が即死したと推定されている。

たしかに、業火の中で死んでいった人たちは、悲惨な犠牲者にちがいない。

が、あの日から今日まで二十二年間、原爆症に苦しみ、また、一見健康体でも、いつ原爆症が出るか、と恐怖におののき、子どもや孫たちの誕生のたびに、奇形児が生れるのではないか、とたえず不安にさいなまれてきた人たちは、生きていただけに、より以上の犠牲を強いられたのではないのか。

いうまでもなく、広島と長崎は地球上で原子爆弾によって攻撃された経験を持つただ二つの都市である。この時の原爆の威力は、普通のTNT火薬の約二万トンに相当する、といわれる。一トン爆弾の火導量が約五〇〇キロぐらいだから、広島の原子爆弾は一トン爆弾四万発に相当する。いいかえると、広島や長崎に原爆を積んで飛んできたB29一機は、普通の爆弾を積んできたB29四、〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

〇〇機に相当したわけだ。そのうえ、放射能と、原爆後遺症のおまけまでつけて――。

一九六五年春、スペインで墜落した水爆積載のB52は、TNT火薬二、五〇〇万トン（二五メガトン）相当の水爆二ないし四個を積んでいたといわれる。水爆二個で五〇メガトン、一トン爆弾に直すと一億発だ。広島、長崎に原爆を積んで飛んできたB29の、なんと二、五〇〇機分である。

アメリカにはそんなB52が約六〇〇機、一メガトンの水爆弾頭を持った大陸間弾道弾が約一、〇〇〇発、同じように一メガトンの水爆弾頭をつけたポラリスミサイルが、潜水艦に積まれて六五〇余発。米、ソ合わせて、今日、水爆は四万五、〇〇〇メガトンに達する。地球上の人口で割ると、一人あたり爆薬二五トン分の核爆弾が〝存在〟しているわけだ。

地球上で、核兵器の攻撃目標になり、原子爆弾の洗礼を受けた二つの都市ヒロシマ、ナガサキ。――人類はじまって以来の体験をし、いまだに、放射能の影響に苦しみ、おびえている被爆者に、効果的な対策の手が差しのべられているだろうか。生きている被爆者の実態はどうなのか、被爆者は何をのぞみ、何を訴えているのか――この二つの都市の住民たちが受けた原爆の洗礼を、われわれは、広島、長崎の住民だけの体験としてほうっておいていいのか。――被爆者たちのおかれた立場、周囲の受けとり方、そして、それにつながる原水禁運動や平和運動を、もう一度ふり返って考えるために、何ひとつ実態がわからないまま放置されている被爆者の話を聞こう。世界に、平和を

訴えるため、世界の国々に核兵力の廃止を決意させるためにもわれわれは、その根底となる被爆者にあらためて目をむけねばならない。核時代に、一人当り爆弾二五トン分の核兵器に囲まれたこの時代に、核エネルギーが使い方によってはどれほど、人間に破壊と悲劇をもたらすかを、広島と長崎の被爆者たちは確実に知っている。

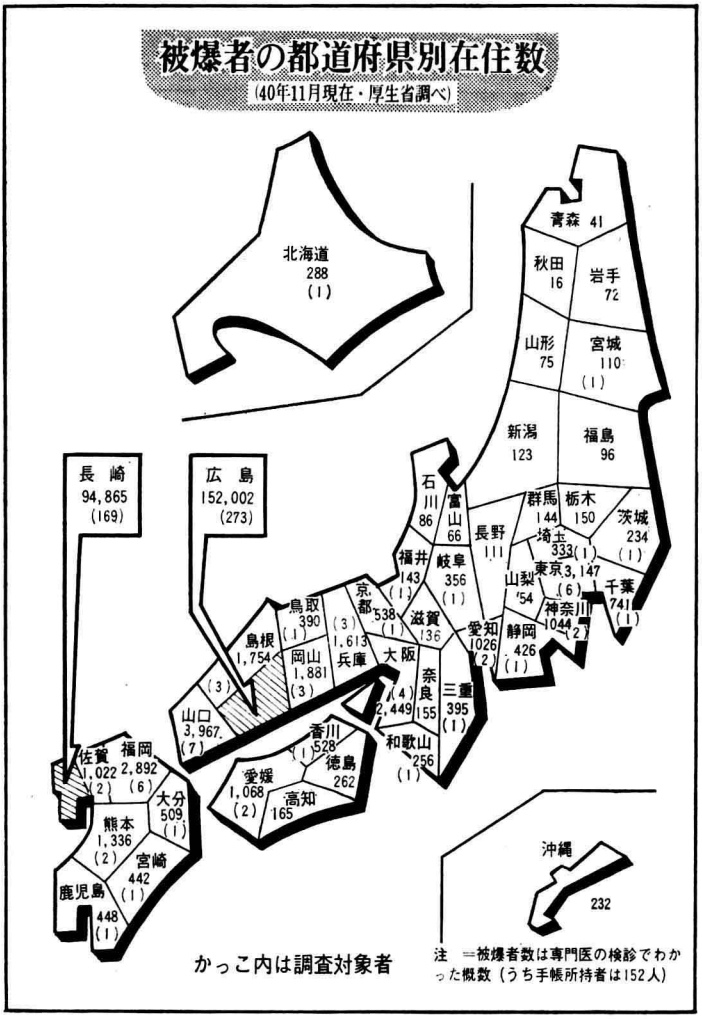
四十年十一月一日現在の厚生省の調べでは、広島、長崎の被爆生存者の数は二七万七、九五五人、その人たちは全国に散っている。しかし、何といっても多いのは広島、長崎だ。都道府県別の数字をあげると次のようになる。

広島一五万二、〇〇二人、長崎九万四、八六五人、山口三、九六七人、東京三、一四七人、福岡二、八九二人、大阪二、四四九人、岡山一、八八一人、島根一、七五四人、兵庫一、六一三人、熊本一、三三六人、愛媛一、〇六八人、神奈川一、〇四四人、愛知一、〇二六人、佐賀一、〇二二人、千葉七四一人、京都五三八人、香川五二八人、大分五〇九人、鹿児島四四八人、宮崎四四二人、静岡四二六人、三重三九五人、鳥取三九〇人、岐阜三五六人、埼玉三三三人、北海道二八八人、徳島二六二人、和歌山二五六人、茨城二三四人、高知一六五人、奈良一五五人、栃木一五〇人、群馬一四四人、福井一四三人、滋賀一三六人、新潟一二三人、長野一一一人、宮城一一〇人、福島九六人、石川八六人、山形七五人、岩手七二人、富山六六人、山梨五四人、青森四一人、秋田一六人。

もちろん、これは被爆者に医療上の援助をするために三十二年に設けられた原爆医療法にもとづいて、被爆者たちが被爆者健康手帳交付の申請をして交付された数で、現在、申請中の被爆者や、手帳をとりたくなくて無視している者は含まれていない。

むざんにえぐられた天使像　これは物いわぬ証人だ
（長崎・浦上天主堂）

これらの被爆者たちが、戦後二十二年をどのように生きぬき、何を考え、あの人類最初の悲惨な体験をどう受け止めているか、混乱を続ける原水爆禁止運動に、どのようにつながっているか、を調べるのが、今回の追跡調査の主な目的だった。広島、長崎に落された原爆とそれによって一瞬のうちに肉親を失い、


被爆者の都道府県別在住数
(40年11月現在・厚生省調べ)
北海道 288 (1)
青森 41
秋田 16
岩手 72
山形 75
宮城 110 (1)
新潟 123
福島 96
長崎 94,865 (169)
広島 152,002 (273)
石川 86
富山 66
長野 111
群馬 144
栃木 150
茨城 234 (1)
埼玉 333 (1)
東京 3,147 (6)
千葉 741 (1)
山梨 54
神奈川 1044 (2)
福井 143 (1)
岐阜 356 (1)
京都 538 (1)
滋賀 136
愛知 1026 (2)
静岡 426 (1)
鳥取 390 (1)
島根 1,754
岡山 1,881 (3)
(3) 1,613 兵庫
大阪 (4) 2,449
奈良 155
三重 395 (1)
和歌山 256 (1)
(3) 山口 3,967 (7)
香川 528 (1)
徳島 262
愛媛 1,068 (2)
高知 165
佐賀 1,022 (2)
福岡 2,892 (6)
大分 509 (1)
熊本 1,336 (2)
宮崎 442 (1)
鹿児島 448 (1)
沖縄 232
かっこ内は調査対象者
注 =被爆者数は専門医の検診でわかった概数（うち手帳所持者は152人）

いやおうなしに人生の道をねじまげられた被爆者たち――原爆の記憶や、個々がのこした悲惨な記録や、訴えは多い。広島市の原爆ドームや、長崎市の浦上天主堂をはじめ、記念物や記念碑はある。被爆者の組織もできている。だが、二七万七、九五五人の被爆者が、どんな健康状態で毎日を過ごし、何を考え、何を訴えているか、詳細な調査は、これまでほとんどなされていない。厚生省が四十年秋に広島、長崎両市に住む被爆者を中心に面接やアンケートで調査、集計をしたが、それが、唯一の調査だ、といってもよい。

朝日新聞社が全国の通信網を動員して行なった追跡調査は戦後はじめての、画期的な試みでもあった。全国的な規模で五〇〇人の〝証人〟を抽出、記者がひとりひとりに面接し、アンケートをとり、さらに深く、被爆者の心の奥まで知ろう、という大変な取材でもあった。

こうして調査した

準備は四十二年春からはじまった。何回もの討議の末、六月には二七万七、九五五人の被爆者のうちから、関係の当局や被爆者たちの協力を得て、あらゆる階層、年齢の人たちを無作為に選んだ。五〇〇人という人数は、対象になった被爆者総数のうち約五六〇人に一人という、「世論調査」としても確率が高く、定められた日数内で調査可能な数として決められた。

その結果選び出された被爆者は広島市一八〇人、長崎市一四三人、広島市を除く広島県下九三人、

長崎市を除く長崎県下二六人など、広島、長崎を中心に全国三〇都道府県にわたった。

多数の被爆者が住む広島、長崎両県下には、東京から、名古屋から、また大阪からも、多くの記者が集り、同時に朝日新聞社の全国通信網を動員して、記者がひとりひとりに直接面接した。また、人数すら明確にされていない沖縄在住の被爆者については、朝日新聞那覇支局で実態を調査した。

一人の被爆者と会うために、三度も離島へ船で渡った記者もあれば、たった一人を追って、四日がかりで三つの県下をまわった記者もある。

出張中や、他府県へ転居といった被爆者も多かった。それらの場合には、すぐ通信網を駆使して、旅行先、転居先まで追跡、面接した。被爆当時、幼年だった人たちの体験を確認するため、その家族などにも会って、調査を確実にした。

十年ひとむかしという。二十年ならふたむかしだ。二十年たてば幼児も一人前の若者になり、中年の働きざかりはもう老年に足をふみ入れている。成長し、赤ちゃんを生み、孫ができ……世代は刻々と交代する。

「その人なら、この間亡くなったよ」

わたしたちが捜し当てると、そう教えられる被爆者もあった。

「おばあちゃんは、もう口もきけん」

そんな老衰の被爆者もいた。

死亡、老衰、外国旅行者など、追跡や、面接が不能だった人たちの分は、調査対象を新しく補充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook